The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	性格と自律 ： Ｊ．Ｓ．ミルの自由主義の倫理学的焦点
Author(s)	馬嶋, 裕
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44772
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【11】

氏　　名	馬嶋　裕（まじま　ひろし）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１８２９６　号
学位授与年月日	平成 16 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学　位　論　文　名	**性格と自律－J. S. ミルの自由主義の倫理学的焦点－**
論文審査委員	（主査） 教　授　中岡　成文 （副査） 教　授　鷲田　清一　　教　授　入江　幸男

論文内容の要旨

本論文は序と結語以外に、以下の７章からなる。１．議論の背景：功利主義を中心とした近現代倫理学説の概観、２．ミルにおける主体と性格、３．ミルの倫理学説における「性格」概念の意義、４．ミルと自律性、５．ミルの自律論的解釈と現代自由意志論、６．内在／道具的価値という区別からの検討、７．卓越主義と公共的討議を通じた確実性。400 字詰め原稿用紙に換算して約 317 枚に相当する分量である。

第１章は、ミルがそのもっとも有名な代表者の一人である功利主義についての概観であり、その後の研究・論争史に対する見通しを提供するとともに、それに関連する本論文の基本的立場を明示する。それは、１．ミルは自由至上主義者ではない、２．ミルは価値の主観主義（少なくとも純粋なそれ）は採っていない、３．ミルの自由主義は「価値の中立性」の想定（現代の多くの自由主義理論の立場）には依拠していない、という主張である。

第２章では、ミルの倫理学・社会学理論における人間主体の独立性の要件が習慣ないし性格という経験的概念に求められていると想定し、それを検証している。その際、行為の非行動主義的な解釈のもと、性格は行為の習慣として規定される。

第３章では、さらに進んで、ミルの主要テクストの中で性格概念が占める位置が検討される。ミルは消極的自由（さらには「他人の権利を侵害しなければどのような行為も許容される」という他者危害の原則）を主張しているとしばしば考えられているが、彼の最終的関心はむしろ「性格の理想」に向かっていると結論される。

第４章では、ミルの自由論に「自律性」としての自由を読み込む解釈の当否が検討され、自由意志論に関するフランクファートの説（欲求の階層性モデル）を引き合いに出したうえで、快楽の質の判定を行う「有資格者」をめぐる議論は「欲求－選好の自己形成」という視点から解決すべきであると結論される。

第５章では、自己決定について論じている。消極的自由（ないし危害原理）以外の自律性概念は見いだされるか否か、経験論・実証主義の立場からの許容可能性、自律論の倫理原理上の問題（功利主義と背反しないか否か）が順次検討される。

第６章では、ムーアの内在的価値と道具的価値の区別を手がかりに、ミルの倫理思想における性格と自律性との関係についてさらに立ち入った分析がなされる。ミルが性格の理想を内在的善と認め、その実現を正しいとみなしているのであれば、自己決定を前提とする個人主義や功利主義（幸福を重視する）よりは、古来よりの卓越主義の立場（徳を重視する）に近づくという論点である。

第７章では、明らかに卓越主義的構造を有するミルの統治論は、いかにして自由主義ないし個人主義的なものたりうるのかが問われ、有資格者が存在しうる条件の整備、つまり国民の知性・徳性の向上がミルの直接的具体的な目標であると論じられる。

論文審査の結果の要旨

本論文でもしばしば言及されているとおり、Ｊ・Ｓ・ミルは功利主義・自由主義・個人主義の代表的論客にして、現代の生命倫理学の１つの中核をなす危害原理の提唱者として受け止められることが多い。申請者は、現在の倫理学理論において見直されている古来よりの徳論ないし卓越主義の伝統を顧みると同時に、ミルの経験論的ないし心理学的前提をも十分に尊重しつつ、さまざまな論者の議論をよく精査し、丁寧に比較検討している。その結果、自律性論と卓越主義の間で、ミルはむしろ自助、意欲、能動性といった性質を望ましい性格としてよりひんぱんに取り上げていること、自分の真の欲求に従って生きる人間の「真正さ」authenticity にも言及しているが、これは積極的目標というよりは、他の内在的価値が依拠すべき基礎と位置づけられていることなどが判明してくる。ミルの基本テクストを忠実かつ詳細に解釈していく着実な姿勢は、研究者として好ましいものであり、現代社会の社会規範の１大前提となっている自律、自己決定の根底に新しい光を当てることに成功している。

他方でしかし、本来ドイツ・ロマン主義にもさかのぼる性格概念の理解にやや広がりが欠け、ミルの「善」の構想ないし卓越性の概念に（同時代人によりすでに批判されていた）インド人への差別などの事実的ゆがみが伴っていることを看過し、さらにフランクファートの欲求の階層性モデルがミルの議論と同型的だという中心的主張をなす際に、その比較に２、３の小さからぬ難点がつきまとうことを軽視しているなど、その論の運びにいくつかの疑問が残るのも事実である。けれども、ねばり強いミル解釈を通して、公共的討議という現代的可能性を最後に浮かび上がらせたことに象徴されるように、ミルの研究史に少なからぬ貢献をしていることは確かであり、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。